

学園ニュース

富山大附

NO. 79

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学学生部

平成 5 年 2 月 2 0 日



(写真：富大フィルハーモニー)

ヴォルフガング・ポデュシュカ氏（元ウイーン・フィルハーモニー管弦楽団
コンサートマスター）を迎えての公開練習風景〔於：黒田講堂〕

（円内：ポデュシュカ氏）

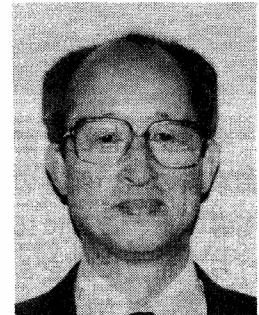
目次

卒業生へのはなむけの言葉	各学部長	1
退官教官所感		6
新任教官紹介及び挨拶		16
在外研究報告「アフリカはまだ遠いか」	人文学部教授 赤坂 賢	17
特定研究報告「画像・映像認識能力分析、育成システムの開発に関する研究」		
	教育学部附属教育実践研究指導センター助教授 吉田 雅巳	19
留学感想	外国人留学生（経済学部）陳 泉発	21
トピックス		23
卒業生だより	昭和35年 教育学部卒 武内 律馬	28
学生サークル紹介		29
学生部だより		31
ヘルン文庫	人文学部教授 平田 純	34

卒業生へのはなむけの言葉

卒業生に贈る

人文学部長 ひら 平 た 田 あつし 純



ここに、富山大学人文学部人文学科、語学文学科の課程を修めて学士（文学）に認定された皆さん、また人文科学研究科で日本・東洋文化専攻、西洋文化専攻を修了して修士（文学）の学位を授与された皆さんに、心から卒業おめでとうとお祝いの言葉をお送り致します。

皆さんが入学されたのは年号が平成にかわってからでありました。それは日本の歴史で変動に満ち、重大な意味を持った昭和という時代が終わり、新しく二十一世紀に向けての準備に入ろうとするときでありました。それまでは、水に始まって、石炭、石油、更には原子などのエネルギーを利用して「ひと」の物質的生活様式を変える歩みが、すなわち「進歩」と見なされ、推賞されてきたのですが、こうした物質的繁栄を求める生活のもたらすマイナスへの反省も見られるようになりました。これからは、「ひと」は英知を集めてそれらのマイナスを解消していかねばなりません。

二十一世紀は国際化の時代と言われます。「国際的」とはいかなることを言うのでしょうか。英語が国際語と言われますが、それは現在の地球上で最も広い範囲で通用し、伝達的手段として用いられていることが裏打ちになっています。国連の資料によると今地球上で157もの国が、各々の固有の文化と言語を持って存在しています。それらの人たちが互いに伝達し合おうとするとき、固有

の言語は共通理解を進めるのではなく、かえって妨げることになります。その時の伝達媒体として広く使われているものを「国際語」と言っています。媒体も重要ですが、もっと重要なのは伝達される中味であることは言うまでもありません。各自の固有の文化こそが伝達内容として最も大切なのです。「ひと」として共有するものと固有のものを併せ持つ存在として、相互にそれぞれの固有の文化（すなわち生活）を尊重し合ってはじめて国際的理解が推進されるのです。多様な価値を認めるというのも、このことに他になりません。この態度は国際化を進めるとき、根幹として無くてはならないものです。

開かれた世界であるために、世界の国々は共通の理解と協力を持ち合わせねばなりません。固有の文化を保持しつつ、それとは異質の文化を理解し、摂取総合して、より高い生活を築き上げようとしていく営みが、将来の世界像として描かれます。皆さんが人文学部の学生生活を通して身につけられた技術と学識（art and science）は正しくこの方向に向かうものだと考えられます。二十一世紀は皆さんが活躍する場です。広い視野と深い思索とで、着実に歩んで行って下さい。皆さんの新たなる出発に当たって、健康で充実した日々があるように祈念します。Bon voyage！

御卒業おめでとう



教育学部長 山地啓司

卒業生の皆様、御卒業おめでとうございます。御家族の温い保護の下、また実に多くの先生方の指導の下、ここに16年余りの学校生活に終止符を打ち、希望に胸をふくらませて実社会に巣立たんとする皆様方に、心よりお慶び申し上げます。

皆様方が義務教育からこの最高学府までに受けてきた教育は主に知識の獲得、集積にあったのではないかと思います。“知識は力なり”という言葉は学生時代には真実味を帯びた言葉です。しかし、これから巣立たんとする実社会は知識の多寡だけでなく、知識と知識とをいかに有効に結びつけ、新しいアイデア（知恵）を生み出すか、また、それをいかに生産に結びつけてゆくかが問われることとなります。そこでは、創造的発想だけでなく勇気と行動力が問われます。したがって、学校時代とは評価尺度が異なるため、学校時代の秀才が実社会での秀才とはならないことが起こります。

大学には卒業という言葉がありますが、教育や学問には卒業はありません。今日まで学んできた教育学問は科学の広大な領域や量のほんの一部にすぎません。学校で培った知識や知恵を基礎に、これから自学自習によってどれだけ学問を積んでいくかによって個人の力の差はとてつもなく大きくなるでしょう。中国の古典「礼記」は、学問には蔵・修・息・游の四つの段階がある、としています。「蔵」とは、学問の基礎的、原理的な知識を記憶すること、「修」とは、知識の集積だけでは消化不良になるから知識をそしゃくし、血となし肉となすこと、すなわち、知恵として出すこと、「息」とは、学問が自分の体の一部となり、呼吸と同じように無意識に作用するようになること、そして「游」とは、学問と戯れ、学問を楽しみ、学問を愛するようになること、すなわち、この段階に至って初めて学問を完全に修得したということとなります。学問を楽しみ愛する心境に達する

ことはなかなか難しいことですが、今後さらに自己研鑽に励み、その境地に達することを期待しています。

卒業後、それぞれ進む道は異なっても、各人目標を持ち、夢を持ってその実現に勇往邁進していただきたいと思います。ある大会社の工場を訪問した折、案内していた部長さんが次のような興味深い話をして下さいました。「わが社では新入社員全員にある期間ベルトコンベアに乗って製品の組み立て作業を行ってもらうことにしています。ドライバーでネジを回すなどの単純な作業です。実習期間の後、全員に感想を聞くことにしていますが、その時、将来出世する社員とそうでない社員の区別が凡そつきまします。前者は製品が完成した姿を思い浮かべながら、あるいは新しい製品をイメージしながら作業するため、ネジを回す程度とか、より能率的な作業方法を考えています。一方、後者は忠実に指示された作業に専念し、他のことを考える余裕がないため、いつまでたっても進歩や発展性がありません。」すなわち、前者は同じ単純作業を行いながら、製品や生産過程の全体を見渡すことができる能力を有し、後者は小さな一事にとらわれ全体が見えないこととなります。この話は我々に貴重な教訓を与えています。すなわち、職場のいつ、いかなる立場にあっても全体が眺められ、その中で自分の職務をどのように遂行しなければならないかを考える大切さを教えています。いいかえれば、オーナーシップを持つということです。与えられた仕事を行うのではなく、自ら進んで選んだ仕事を行うことによって、仕事に興味を持て、楽しく仕事を行うことができるようになります。孔子も次のように言っています。「これを知る者は、これを好む者にしかず。これを好む者は、これを楽しむ者にしかず」と。

どうか、これらの教訓を念頭に置き、有意義な楽しい人生を送って下さい。

経済学部 の 卒業生 諸君 へ



経済学部長 吉原節夫

この度めでたく卒業される皆さんに対して、まず心からお祝い申し上げます。この文章が学園ニュースの形で諸君の目に触れるのは卒業式当日のほずであり、学士の学位記を手にした諸君の晴れ姿を想像しながら筆をとっている。ご同慶の至りである。

さて、長い間の学園生活から巣立って社会の各方面で活躍することを期待されている諸君に、激励の思いを込め、私見によるアドバイスないしは要望を若干述べておきたい。

第一に、気に入らない仕事や課題を与えられても、「逃げ」の気持ちをもたず、立ち向って取り組んでほしい。諸君の今の心境は、4月に新入社員・新入職員として入る会社・役所等に対し胸が踊るような希望や夢で満ちているだろうが、就職して実際に自分に課せられる仕事は、必ずしも楽しくやり甲斐のあるものとは限らない。むしろ、往々にして、配属される職場や担当する職務に失望したり不満をもつ場合が多いだろうと思われる。私も、大学における各自の専攻分野とは畑違いの仕事が割り当てられた卒業生の例を数多く見聞してきた。

いうまでもなく、経済学部卒業の諸君と会社等との労働契約では、嫌な仕事から逃げようとしても逃げられない。それより、逃げようとする姿勢が、上司や先輩をはじめ周囲の人々に実にはっきりと見えるものであることを注意しておきたい。どんな仕事であれ、積極的に、そして誠実にこれと取り組めば、学ぶこと教えられることが極めて多く、それが肥やしとなって後日に大きな成果を生むことになる。

第二に、社会に出てから具体的に当面する問題について真剣な勉強がずい分要求されるのであって、諸君は、学園の卒業に際し、これから更に専門的知識を増やし実力を大いに伸ばす意欲を新たにしてほしい。

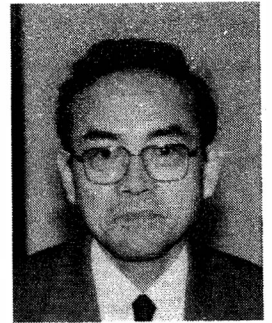
諸君が大学で学んだことは、それぞれの分野に

おけるほんの基礎的部分にすぎない。今後の職場や家庭の生活において、より専門的・实际的な調査や学習が必要となり、まさに生涯学習を求められる。諸君のこれまでの学業年数よりもこれからの就業年数の方が長いことを考えれば、多言を要しない。諸君の採用を内定した会社や官庁は、現在の大学生としての学識は甚だ不十分であっても、就任後に諸君が国立大学経済学部の卒業生として大きく成長する可能性をもっていると期待し評価しているわけである。諸君が講義や演習を通じて、課題へのアプローチの仕方、論理的思考による分析・整理の仕方を教えられたが、それを応用してできるだけ広い分野に研鑽を続け、物事を自分の頭で掘り下げて考えるよう努めてもらいたい。諸君の先輩たちは、同じ道を歩み色々な分野で期待に応じて活躍し富山大学経済学部卒業生の世評を高めてくれている。諸君も、そのあとに続いて一段と飛躍していただきたい。

最後に、単に「知」を広げるだけでなく、「情」を豊かにし「意」を強くして、調和のとれたスケールの大きい人間形成をめざすことが肝要である。とはいえ、ことはそう簡単に達成できるものではない。このことについては、諸君に努力賞・敢闘賞を獲得するよう精励してくれることを望むものである。努力する者は必ず報われるであろう。

ここ1年ばかりの新聞記事では、佐川急便事件の疑惑解明、バブル経済下の財テク失敗による倒産、脱税者に対する高額の追徴課税などが目についたが、これらはカンニング行為が学園のみならず社会でも厳しく糾弾される姿を映している。これからの人生を、フェアで活々とした言動と気概をもって進んでほしいものである。諸君が雪國富山で培った忍耐力は、幾多の困難に遭遇したときにきっと大きな支えになってくれるであろう。同窓会（越嶺会）の各支部総会に出席すれば、諸先輩から有益な経験談を聞くこともできる。各地での再会を期待し、ご健闘とご多幸を祈る。

新理学士・新理学修士の皆さんへ



理学部長 松本 賢一

皆さんが富山大学理学士・富山大学理学修士と
なられることを心から祝福致します。富山大学理
学士によって表される内容について、私たちは、
それが、広い視野と教養、専攻した学問に関する
しっかりした基礎学力、そして、何よりも、自然
科学的思考力と考えます。又、富山大学理学修士
については、それが、すぐれた専門学力、それに
基づく課題解決能力と一定の課題設定能力と考え
ます。皆さんが、それらを力にして、力いっぱい
活躍されるよう切望します。

皆さんが専攻学科と配属講座で専門の力を培っ
た時期は、富山大学の教育改善が検討され進めら
れた、開学以来の大改革といわれる、時期でもあ
りました。多くの教職員の膨大なエネルギーが、
教育・研究にのみならず、教育改革のためにも注
がれました。皆さんもきっとその息吹に触れたこ
とと思います。幸い、教養教育と専門教育の課程
区分の解消と4年一貫教育への移行及びそれに伴
う組織改革が、平成5年度から、実現の運びとな
りました。その一環として、理学部における教育
も、今迄の自然科学の基礎に関する2年半の専門
教育から、全学の教養教育、及び、自然科学と関
連社会的要請分野の基礎に関する4年一貫の専門
教育へと改善されます。それに伴い組織も、今迄
の5学科23(小)講座から、6学科(生物圏環
境科学科新設)12大講座へと拡充され、旧帝大系
以外で最大規模の理学部となります。昨年の卒業
生へのはなむけの言葉(学園ニュースNo.75)の中
で、「この40年間に、既に延長的展望にクローズ
アップされ始めていた核戦争の脅威とその克服と
いう人類的課題に加えて、開発と環境との矛盾が
重大化し、その克服が人類的課題となりました。
ローマクラブ報告(1972)、プラント報告(1980)
、ブルントラント報告(1987)等のすぐれた研究
が発表され、各種の2000年時展望が試みられ、多
くの国際会議が組織されてきました。この課題は

世界市場形成の勢いと南北間をはじめとする様々
の矛盾、人口問題や食糧問題等、とも関連し、極
めてむずかしい、しかし、次の40年間には、克服
のいとぐちを見出さねばならない、人類的課題と
なっています。それについて、ブルントラント報
告の指摘する「『持続的開発』と『公正』の実現
とは対の概念」への指向やこの課題へのバイオサ
イエンスはじめ理学の基礎的寄与等が鍵となるこ
とを予想しています。」と書きましたが、生物圏
環境科学科の大きな基礎的寄与を念願しています。
理学部は、その前身である文理学部理学科の発足
から数えて今43才で、これから50才、70才、100
才の節目を通過します。皆さんが、30才前後、50
才前後、80才前後の時期に。その間の各一定時期
の職責を担う教職員の努力と同窓生の皆さんのご
健闘によって、各節目で、「幸い今、本学部は將
に黄金時代にあると云っても過言ではない(富山
医科薬科大学薬学部百年史2頁)」と云えるよう
にしたいものです。

人間は、ある程度まで、遺伝的資質と環境から
自由です。人間以外の動物の生き方は、ほとんど、
遺伝的資質と環境に規定されています。人間にとっ
ても、遺伝的資質と環境は大きな規定要因ですが、
しかし、かなりの程度、それらから自由になるこ
とができます。そして、その自由さが人間らしさ
の重要なバロメーターともいえます。その自由さ
はどの様にして得られるのでしょうか。それは、
成しがいのある、成すべき、成し得る目的をしっ
かりと選定し、それを達成しようとする強い意思
を持つことだと思います。このことを自覚し、能
動的に、納得できる人生を創られるよう切望しま
す。

工学部卒業生・修了生の皆様へ

工学部長 多々 静 夫



工学部卒業生・修了生の皆様は蛍雪の功なっ
てここに学士・修士の学位を取得され、学窓を去
られる日をお迎えになりましたことは誠に
お目出度く、工学部教職員一同に代わり心
からお祝い申し上げます。

御父母、御家族におかれましてもさぞかし
お喜びのことと存じます。

さて、昨今の世情はバブル経済の崩壊以来株
価の低迷に加え一般消費の減退と、企業の設
備投資の低下など経済的に明るい話題がみ
られず、企業によっては倒産に追い込まれ
たり、事業の縮小など厳しい状況となっ
ております。

この世情の厳しい中に学窓を巣立つ皆様
方は、ある面では期待と希望に胸を膨ら
ませ、ある面では今後の先行きに不安を感
じ、複雑な心境にあるのではないかと推察
いたします。しかし、我が国が現在の経済大
国を維持してゆくためにはどうしても工業
技術立国として先進国と肩を並べ、ある
いは追い越して行かなければなりません。

幸い私達の諸先輩が甚大な努力をはら
われたお蔭で、我が国の生産技術は世界
の最先端に立っていることは周知のことで
あります。

皆様方はこの大きな成果をより一層発
展させるよう努力し、創造性豊かな独自
の新たな技術の開発を目指して邁進し、世
界平和と人類の幸せに貢献してゆく重大
な責務があり、それが我々技術者の目標
であり理念であると考えます。

とは言うものの自国のみを考えたのでは
日米貿易の不均衡のようにECなどとも貿易
摩擦を生ずる可能性があることを否定でき
ないでしょう。

この様なことから、今後、全ての工学人
は国際的センスも持ち合わせねばならな
い時代であることを念頭におく必要があ
ると思います。それは、発展途上国に対
しての技術指導、技術移転においても、
また、逆に技術導入や国際学会などにお
いても当然国際的センスが重要な要素に
なることは間違いありません。それには誠
実に努力を重ねることでありましょ
う。亀井住友電気工業会長の書かれた本
に次の様なことが書かれていました。

中国の孟子いわく「誠は天の道なり。誠を
思うは人の道なり」つまり万物にあまね
く、古今につらぬいている誠、これが天
の道である。この天の誠に背かぬよう
に努めるのが人間の道である。

また、中国の古い書物である易経には
「天行健なり、君子以て自疆して息ま
ず」と書かれている。自疆とは自ら努力
することで、天の運行（太陽とか月、星
の運行）は健やかで、一刻も休むこと
がない。君子もそれを見習って、自ら勉
強して、やむことなく誠実に努力しな
ければならないという意味で、一時の
はったりや思いつきで動いてうまくい
ったとしても、一寸努力を怠ると直ぐに
バケの皮がはげてします。なんといっ
ても「自疆して息まず」であるべきだ
ということでしょう。

いま一つ大切なことは、行動するとい
うことではないでしょうか。行動しな
ければなんにも出来ないだけでなく、
なんにも見えてきません。アメリカの
詩人サミュエル・ウルマンの詩に、

私は茨の道を求めない
悲しみが消えようとも求めない
日のあたる毎日も求めない
夏の海も求めない

輝く陽光と 永遠の昼のみでは
大地の緑は しほみ衰える

涙の水がなければ 歳月を通じて
心の奥底は希望の 蕾を閉じる

人生どんなところでも 気をつけて探せば
豊かな収穫をもたらす
というのがあります。人それぞれの人生
があるでしょうが、とにかく行動する
ということが大切であろうと思いま
す。

どうか皆様には健康に留意され、「自
疆して息まず」そして「行動する」とい
うことを十分考えて戴き、立派な社会
人に成長されることを、そして一層の
ご健闘とご活躍をお祈り申し上げ、
はなむけの言葉と致します。

退官 教官 所 感

このたび、本学でご活躍された10名の教官が停年により本学を去られることになりました。退官に際し、先生方からそれぞれの思いでなどを執筆していただきました。

停年退官にあたって



人文学部教授 川本 榮一郎

富山大学に8年間、大過なく勤めさせていただくことができましたのは、ひとえに人文学部の先生方ならびに事務の方々のご懇切なご指導ご支援の賜物と深く感謝いたしております。ほんとうにありがとうございました。

なおまた、国語国文学コースの学生諸君には、毎年夏休みに実施いたしております富山県方言の臨地調査にいつも大勢参加していただき、深く感謝いたしております。おかげさまで、富山県方言の貴重な資料をたくさん得ることができました。今後もこれを活用しながら方言研究を進めていきたいと思っております。

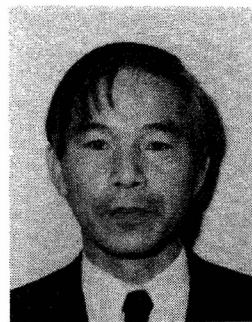
富山に参りましてから、私がこれまで住んでおりましたのは、呉羽山の西側にある呉羽富田町というところでした。呉羽山のすぐそばに住んでいながら、老人性狭窄症による腰痛のため、今はもう呉羽山へ歩いて行くことができなくなりましたが、以前は、早朝散歩のたびに呉羽山へ歩いて行ったものです。そして、展望台のところから、雄大な立山連峰とその

下に広がる富山市街を眺め、その景観の素晴らしさにいつも深く感動したものでした。立山連峰といいますと、呉羽山天文台の登り口にあります大伴家持の歌碑のこともなつかしく思い出されます。その歌碑には、家持の「立山に降りおける雪を常夏に見れどもあかず神からならし」という歌が彫り込まれていたからです。呉羽山はまた桜の名所としても知られているところです。満開の季節になりますと、爛漫と咲き匂う桜花を心行くまで観賞しながら、桜並木の中をよく歩いたものです。呉羽山は、私にとりましても、生涯忘れることのできない思い出深いところになるだろうと思っております。

停年退官後は、郷里の青森県に帰り、弘前の寓居で暮らすこととなります。富山を去るにあたり、これまで一方ならずお世話になりました皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、富山大学のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。筆を擱くことといたします。

A d e !

人文学部教授 吉田 清



私は、院生時代、前任校時代、在外研究期間の合わせて16年をのぞく49年間を生まれ育った越中で過ごし、そのうち22年間、母校の富山大学に奉職することができた。何ととっても故郷は寛ぎを与えてくれるし、母校は最高に働き甲斐がある。その間、わがままで頑固な私を導き、あるいは寛大に見守ってくれた上司・同僚の教職員と、いい教え子に恵まれ、私は幸せであった。

五福のキャンパスもよい。街の中心からちょっと離れているが、その分静かだし、さほど不便は感じない。緑もまあまあで、不足分は周囲の田や山が十分に補ってくれている。

思うにこのキャンパスは今も昔も若者たち集散の場。戦時は、ここにあった連隊へ召集され一定期間の訓練を受けた兵士が戦地へ征った。今は学生が4年間学業にいそしみ社会へ散っていく。

昭和20年、中学劣等生の私をもたもたしているうちに徴兵され、8月1日に入隊したのもここだった。当時17歳。より若年で軍隊に入った志願兵は別として、旧陸軍の兵隊になった最後の年令層に属する。

連隊はその夜の空襲で焼け、15日に戦争が終わった。しかし9月中旬に復員するまでの勤務に対し何がしかの給与は支給された。これが私の初サラリー。そして今、五福で最後の給料を貰って楽日を迎えることになる。五福と私の縁は深い。

ところで、私は山歩きが好きで北アを中心

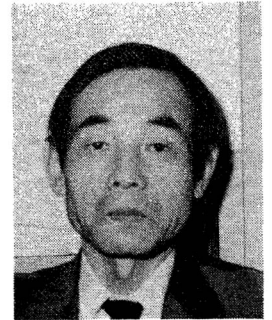
にいくつかの山に登っているが、単なるコース・マニアにすぎないので、可憐な高山植物にさえ殆ど目をくれたことがない。ここ2、3年とみに学内の植物に関心を持ちだしたのは、見取め意識が働くためだろう。

平成3年の4月中旬、小黒現学長が学長候補当選者に選出され、就任の承諾を得るために評議会の使者として教育学部の加瀬教授と私が、岡田庶務課長補佐に案内されて理学部へ赴いた時のことだ。学部のおきで桜の大木が散りしきっており、一瞬3人は見とれたが、花びらの下を、雨だれか何かをかいくぐるようにして校舎のなかへ飛び込んだ。こころゆくまで賞でながら入って行けばよかったのに、今思えば不思議である。風がひどく冷たかったせいかもしれない。ただあの時、新旧学長の交代という出来事と、あと2年に近づいた停年が落花を一層美しくしていたことは間違いない。

平成4年6月の初め、研究生のヴァント君がドイツからやって来た。もうすっかり引退気分になっていた私が彼の指導教官になったのだ。人文学部長や教養部のドイツ語教官に挨拶してから二人が外へでると、教育学部の横に紫陽花が咲き誇っていた。「ホルテンズィエ、リルケも歌ったホルテンズィエですよ」と私が感動して言った。彼は黙って見ている。旅愁を覚えたのか。それともドイツではあまり見られない花なのか。私も黙って花を眺めた。

停年退職に際して

教育学部教授 中谷 隼一



昭和24年、富山大学教育学部に入学、同28年卒業、4月、図画工作科助手に奉職して以来、今日までの43年間、楽しく、価値ある勉学と、勤務をさせて頂きましたことを、先ずもって、歴代の学長・学部長はじめ、教職員の皆さま方、学友、学生諸君に心から、幾重にも感謝申し上げます。まことに有り難うございました。

私にとりまして、富山大学は、母校でありますので、特別の感慨があります。図画工作科（現在図画工作・美術科）の恩師で現在も元気にご活躍でありますのは、玉生正信先生（本学名誉教授・美術史及び美術理論）、小倉玄吾先生（漆芸家・構成デザイン）のお二方だけとなりました。第一期生でしたので、大学・学部、後輩たちからは勿論、広く社会の各方面から注目と関心が集まりました。特に、師範学校出身の先輩方や、旧帝大、旧制大学出身の方々とは、何かにつけて比較されました。新憲法に基づいて生まれた大学であることに誇りを持っていましたが、駅弁大学というさげすみを浴びたこともしばしばありました。しかし、そうした蔑視は、奮起剤とも喝ともなりはしましたが、口惜しさは消えません。他方、本県に誕生した初めての大学ですし、しかも、県内各地域からほぼ自宅通学が可能という立地条件もあって、大学教育の機会が著しく拡大したことを歓迎する方々もたくさんあり、大学や学生を、温かく、積極的に激励・支援して下さいました。60年安保闘争・大学紛争も、忘れられない富山大学の貴重な歴史の一頁でありましょう。

「旧制中学卒業の昭和20年は、日本の戦局が極度に逼迫、ついに未適齢徴集令まで発動さ

れ、私も赤紙動員を受けました。入隊後半月で敗戦、1ヶ月で復員、就職、上京、発病、療養、退職、新制高校へ編入学、卒業、そして富大に入学しました。年齢が同期生より3～4歳も上なのが大きなハンディでした。しかし、恩師（指導教官）大瀧直平先生は、ご自分の人生に似ていたからでありましょう、けんめいにご指導下さいました。助手の時代、実技科目の性格上、放課後の補充が不可欠でしたので、終列車に間に合わなくなり、居残ったことがよくありました。大瀧先生は、いつも、奥様のお心づかいだとおっしゃって、手ずからの豪華なお夕食をお運び下さったものです。先生のお人柄に感激したことから、特別研究（卒業研究）を彫塑とし、先生の尊いご指導をひとり占め致しました。さらに、彫刻家木内克先生（東京・在仏15年、新樹会）に師事させるべくご同行下さいました。また、先生は、卒業生のアフターケアと大学の社会への開放を主張、実行されました。多くの卒業生が参加し、彫塑研修会（発表会の名称は、集団・プラスティカー）を結成、10年間毎日曜日に集い、長期休暇には中央の彫刻家を招いての7日間集中の研修会（経費は参加者負担）も実施して下さいました。その伝統は今も続いています。多くの優秀な彫刻家や教師を輩出しています。三つの次元で美の本質を追求する彫刻を学ばせて頂いたことが、最大の感動体験でした。また、長年の夢でした、大学院の設置も間近いとの朗報は、私にとりまして、最上のおみやげです。母校の不滅と限りない発展と皆さま方のご健康とご多幸をご祈念してやみません。

退官の辞

教育学部教授 白川 郁子



「とやま学術の森」シリーズ（富山新聞）で“「創作舞踊」を教育に”というタイトルで紹介されました。『教育学部には女性の教授が三人いる。白川教授はその一人である。中高校で教師を努め43年に富大へ。創作舞踊を創造性教育の一環として定着させた。国際的に著名な創作舞踊家、邦 正美氏（哲学博士・米フラトン大学名誉教授）に感銘を受け、師事し研究の道へ。学生の発表指導はもちろん、自らも演じ「創作舞踊は人間の芸術で、いくつになろうと、それなりの方法で表現できる」と熱っぽく語る』と。

教育とか芸術の方法論は、実際の行動を通してしか発見できないと考えています。舞踊は舞台での実演と研究機関での実習による他に方法はないのであって、失敗を繰り返しながら批判を受け研究は進められていく。こういう考え方から研究を具現化する方法として、いろいろなやり方の発表会・公演・試演会等々を計画し実践してきました。

教育舞踊実験劇場と称する、学生が創作した作品を一堂に集めて発表する恒例の舞台は今年で40回を迎え、7月に終了しました。

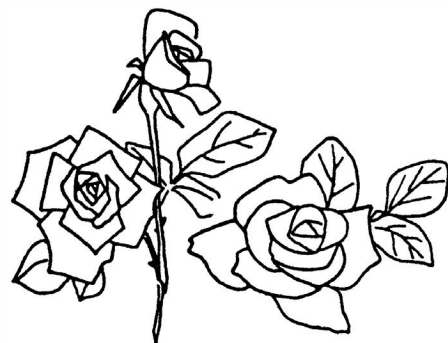
学生のA君が次のような一文をよせてくれました。「舞踊を体験して得たこと 自分の心表現することの楽しさ、自分の美意識を働かせながら、物事を観察し、考え、自分自身を使って形あるものにしていくことは、おもしろかった。そして何よりも他の鉛筆を使うような学問からは得られない、「ヤッタ！ 自分もここまでできるのだ」という驚きと喜ぶがあった。自分の心をみんなの

前にさらけ出すということは誰でも勇気がいるものだが、そのことができたという満足感には、自分の誇りや自信となって、どんな場面でもその力が発揮できると考える。自分自身の心を、からだで写し出す体験によって自分が磨きあげられるのだという教育観を持ちました。」更にA君は隅っこに小さな文字でこう書き添えていました。「今まで受けてきた授業で一番熱中し、努力したのは舞踊です。自分に自信と勇気がもって積極的にになり、嬉しいです。」と。このラブコールによって白川さんは感激し、ますます熱っぽくなるのです。

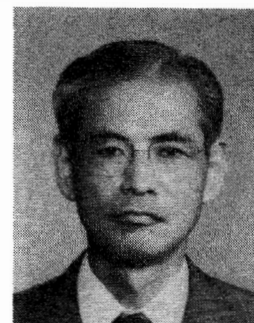
「人間精神は、現実的存在の素材を、精神自身の深奥から、統一的に形成する力である。すなわち思考によってその素材を構成し、美的能力によっていきいきさせ、かつまた行動によって、その素材に理想と自由の形相を刻みつける力である。」ディルタイのこの言葉が、ジンジンと伝わってきます。

—— ここに山終わり、海広がる ——

富山大学25年間、ありがとうございました。



停年を迎えるに当たって



教育学部教授 佐々木 光 三

着任来6年半が経過し、退任の日を迎えることになりました。来学当初のシーンのいくつかは、今も鮮やかなイメージとして脳裏にあります。同時に古い写真を見るような時の経過の感じを伴ってもあります。

いささか無理をして思い出してみますと、最初の教授会での投票の方式や、学生の転退学の処理から、研究費の配分、入試改善の検討過程や選抜の方法などにも、予想と異なることが多く、また多少謎めいて見えることもありました。いままではそれも大方が自然な状態として、生活の知恵として、或いは組織の状況適応の必然として理解できるようになりました。また高等教育のユニバーサル化現象や、それへの対応の一端を実際に体験したことで、今日の大学に対するある種の偏見から少なからず解放された点があると思っています。

ともあれ、足かけ三期にわたってセンター長の席を汚し、その間学内外の皆様から多大な御指導、御鞭撻を賜りました。特に教職員免許法の改正に伴う教育実習単位の増加（「事前及び事後の指導」は、実習改革のかつての流れからすれば変則的でしょうが）、その反面で初任者研修の制度化等をふまえた実習見直しの要望などから、附属学校・園や実習校の教職員の方々を始め、学外の各方面に御負担を加えたことが多くありました。それぞれ真摯で温かいお支え・御協力を頂きましたことに、この紙面を借りて深く感謝申し上げます。ただ初任者研修制度が、将来メンターシステムとして効果を発揮するには、養成期の教育との関連が極めて大切で、実習期間や時期のみでなく、教

育内容・方法などがいっそう問題となるはずと愚考するものです。

いま本学は全体として大きな変革の渦中にあり、また学部は修士課程の設置という永年の念願がようやく成就という場面に到達しました。

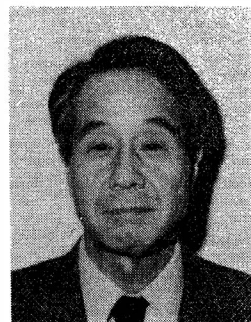
教育実践研究指導センターとしては、優れた実践的資質を備えた教師育成への支援という本来の機能を見失ってはならないと考え、いろいろと試みて参りました。この点でも多大の御協力を頂きましたが、私自身の力量不足から、誇るべき成果も乏しいままに歳月が流れ去ってしまいました。

本年以降の数年間、北陸地区の教員志望者は最も厳しい冬の季節を迎えます。社会の趨勢や時代の潮流の中で、学部が直面する課題を解決するため、それぞれに耐えることの必要な状況が生まれ、かたちを変えながら今日もなお引き続いて存在しています。教育学部のセンターとして、その今日的レゾナントルは何か、如何にあるべきかについては、時宜にかなう見直しが常に求められるべきであり、それだけに十分な共通理解が得られにくい憾みもなしとします。

すべてをこの後の方がたに託することになり、顧みて慚愧の念にたえません。学部とセンターの今後のさらなる発展を念願するばかりです。

共に学んで

理学部教授 杉田吉充



応募のさいに推薦状を書いて下さった恩師が、難関かもしれないがと言われ、また、雪國の経験のない君にはどうだろうかと心配してくれましたが、私は駄目でもともとと楽観していましたので、物理学科の先生方の面接を受けに初めて富山の地を踏みました。運良く採用され、昭和55年春赴任し、学園ニュースに緊張した文章を書きました。以来、早くも13年がたってしまいました。その間、物理教室の自由闊達な雰囲気の中で実に楽しくすごすことができたことを幸せに思っております。

私が物理学科へ入学する頃は、物理でめしが食えるとは誰も思ってなく、ただ好きだからやってみたい、将来は何とかなるだろうと楽観していました。卒業時もまだ敗戦後の経済不況が尾をひいていましたから、就職口はほとんどなく、僅かに高校教員の口がある程度でした。一方、研究室には優秀な先輩方が目白押しに並んでいましたから、機会を見て研究室を出て、民間会社へ就職しました。採用の理由は物理屋はつぶしがきくだったようです。昨今の物理学科の学生の就職の求人数の多さは正に隔世の感があります。27年間を民間会社におりましたから、大学での生活は未知の世界も同然であり、また、これは私にとって第二の人生でもありました。会社では、広く浅い知識でやって行けましたが、講義はそんな知識ではできません。初めて教壇に立ったときは緊張しました。学会講演の方が遥かにゆったりした気分で行ったように思えます。私の学生時代は教科書はほとんどなく、あってもドイツ語のもので、入手できず、ですから授業に出て先生の講義を逐一ノートに記録し、大切

にしたものでした。今は多くの優れた和文の教科書もあり、教える方も楽になったような気がします。私の講義が大切なノートとして残せるものかどうか？ 私にとっては反省ばかりが残ります。

役立つ研究を目指す民間から大学へ移ったからといって、研究内容を急に換えられるものでもありません。以前から手がけてきた半導体結晶の原子構造上の問題を取り組むこととしました。研究室には主要装置としてX線発生装置が一台あるだけでしたが、これまた運良く、特別設備費、特定研究の順番が廻ってきた上に、研究助成金や科研費をいただき、一応の研究態制を整えることができました。半導体の分野は、民間研究機関の最重点のもので、彼等と真正面から競合したら敵わないですから、彼等が手をつけそうもなく、かつ基本的な問題に絞って研究をすることにしました。X線回折による結晶完全さの評価です。これは高エネルギー物理学研究所の放射光を利用する研究へと発展して行きました。飯田先生や学生諸君に大いに助けていただき、数編の論文をまとめることができたことは本当に嬉しいことでした。

横着で無趣味な者ですから、豊かな自然に恵まれた地に住んで、余り出歩くこともなく富山から去ることになりそうです。宿舎の4階から立山連峰を眺めながら朝食をとる贅沢をもう味わえないのは寂しいことです。富山での最初の冬に豪雪にあったのは忘れられない体験です。皆様ありがとうございました。

この八年間のこと

工学部教授 松本幸生



主任の高辻先生から一度富山に来て見ては、とお話のあったのがつい昨日のこのように思い出されるのですが、その連絡を頂いてはじめてこちらにお伺いしたのが昭和59年11月の末、その時期にしては珍しく移動性高気圧におおわれたその日の富山は抜けるような青空のひろがる暖かい一日でした。移転が終ってまだ間もないという真新しい機械系の建物をあちこち案内して頂いたりその後の主任の時沢先生にお目に掛ったりしたのですが、五階の窓から見えるすぐ隣の金属・共通棟に続く化学系、電気系の建物が高岡からの引越前と言うことでひっそりとしたたづまいを見せていたことなど懐かしく思い出されるのです。その後しばらくして目にした移転特集の記事に、“昭和60年7月12日の金曜日に懐しの学舎（中川園町）で最後の集いを開いて……”とありましたが、その熱気がおしよせてくる前の一瞬の静けさでもあったのでしょう。そして幸運にもその後の会議で何度かその“懐しの学舎”を訪れる機会に恵まれたのですが、あの正面玄関わきにひっそりと立っていたメタセコイアは今どこでどうしているのだろう、と思ったりしているのです。この工学部のどこを見まわしてもその美しい姿にお目に掛ることがないものですから。

こうしてその60年4月から工学部生産機械工学科の制御機器の講座で大住・高瀬両先生と制御工学を担当させて頂くことになったのですがとても充実して素晴らしい八年間だった、と心から感謝しているのです。

四月に着任したとき前任の中川先生からのお手紙があり、“周波数特性からはじめて下さい。”とのことでした。二年の後期から制御理論の講義がはじまるのでは基礎的なことも含めてなかなか理解しにくい筈、これから受持つ三年の前期が勝負、とそこで何かとあわただしかった引継ぎ前の

自分にやっと戻れたことが実感できたようです。こちらでの教科書は明石一著“制御工学”と言うことでしたが明石先生が学科の集中講義に来られることもありそのままずっと使わせて頂きました。集中講義のあい間の先生とのお話しは何故か殆ど音楽のことばかりで、その次の年からはヴァイオリン持参で京都から来られるようになりました。先生はなかなかの名手であるのに私の方は鋸の目立て程度、とひどくバランスの悪い組み合わせでしたが、易しく書かれた第二のパートを私が受け持つと言うことで“2つのヴァイオリンのための協奏曲”の第1楽章と第2楽章を何とか数年がかりでまとめることができました。“君のは最後までテンポがくずれないので合わせ易い。”と一応の評価を下さったのですが、下手に鋸の目立てなんかしなでリズムを刻んでいる方がよかったのかもしれない、と思い直している所です。それにしても何とも素敵な楽興の時でした。

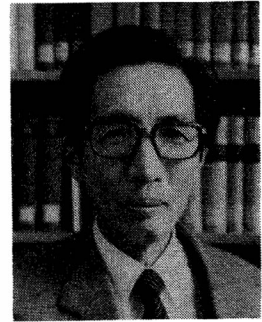
先生の集中講義についてはとくにお問い合わせして状態空間法の話題を加えて頂きました。この所従来の伝達関数法に状態空間法を考慮した講義のスタイルがより一般的になりつつあるようですが、私の場合もいわゆるシグナルフロー線図を用いて制御系のしくみを見易くすることによりこれら両者の関係をよりの確に把握できるよう学部と大学院のそれぞれについて検討を加えてきました。

とは言うものの学科内の雑務や就職担当等でそれらがとぎれとぎれになり万全とは行きかねることも度々たっただのですがそんなとき、学科内からばかりではなく実は大勢の方達からの協力で何とかよい結果の得られたことが大層嬉しく心から感謝している次第です。

この所大学も、大学をとりまく環境も急速に変わろうとしているようですが、皆様のみまますのご健康とご発展を切にお祈りします。

お別れの言葉

教養部教授 大谷重彦



とうとうお別れの言葉を書くことになりましたが、教養部の廃止（予定）を三ヶ月余の後に控えて多事愴惶と日々を送っている今は、まだ退官を現実のものとして捉える心境には至っておりません。何か取りとめもない繰り言を連ねて責を果たすことになるかと思いますが、なにとぞお許しを願います。

私が富山に来たのは昭和30（1955）年で、以後富山に住みついてしまいました。これは私のモノグサな性質からで、申し訳けない事ですが、格別富山に執着したからではありません。当時蓮町にあった文理学部の非常勤講師としてドイツ語を教えることになったのですが、元来富山の人間でもない者が、富大オンリーの非常勤を何の当てもなく三年間もやった、たとえば、私のモノグサぶりがお解り頂けるでしょうか。ところで、そんな私を五年間も議長席に坐らせたままにしておいた教養部教授会もまた相当にモノグサである、と言えましょう。しかし、哲人ディオゲネスの故事を引き合いに、「モノグサ」と「教養」とは全く無縁な概念ではない、などと愚考しますが、如何なものでしょうか。

教養部が設置された昭和42（1967）年度の入学生定員は900人足らずだったと記憶しますが、それを迎える新設教養部の教官定員は僅かに33名（実員はその $\frac{2}{3}$ ）教授会は教養部長事務取扱の学長に召集されて本部の会議室で開かれる、という有様でした。教養部長は全学の教授を被選挙権者として教養部教官が選ぶ、という規定で、これを改訂するのに五・六年はかかったと思います。

このような弱体で発足した教養部ですから、事毎に一般教育の重視を主張し、教養部の独自性を守ろうとして来ました。研究面・設備面でも専門学部にはケをとらぬよう各教官は努力を続け、漸く不十分ながらも現在の態勢が整ってきた次第です。反面、こうした長年の努力が教養部の姿勢を硬直させ、学部教育との間の断絶をもたらしたのも事実でしょう。いわゆる「大学改革」が実現し、「四年一貫教育」が行われようとしている現在、私の二六年間の教養部暮らしをふりかえって、何やら茫莫とした空しさの感を禁じ得ません。

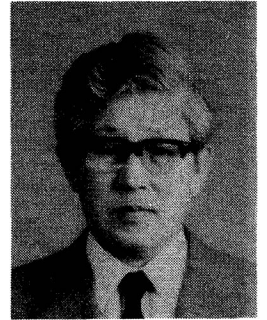
第四代教養部長白井芳朗先生（故人）は「学園ニュース」13号の紙上でただ一行、

去るに臨み、更に言うことなし。学生諸君に望むらくは、只、勉学の一途あるのみ。

と一喝されて去って行かれました。その器でない私も、繰り言はもうやめようと思いません。時代は移っても学生の本分は「勉学」にあることに変わりはありません。学生諸君はどうかこの事を日夜沈思して下さい。

長年にわたり公私共にご指導、ご支援、ご厚誼を頂きました教職員の皆様には、心から御礼を申し上げますと共に、今後ますますのご清祥をお祈りして、お別れ致します。

定年——地図なき旅——



教養部教授 藤井 昭二

自分が定年になるのは誰でもわかっている。私も老人に関する本や、定年に関する本を読んで覚悟はできていた筈であるが、この1・2ヶ月の狼狽ぶりはどういうことであろうか。だんだん横着になって学会直前に発表の準備をするのに似ている。

地質を研究するものにとって地図はなくてはならない情報源である。まず地図を詳しく読み、それを確かめに調査にでかける。

定年後、死ぬまで15年。死についても中学の高校年の時、いかに恰好よく国の為死ぬか、死をみつめていた筈である。

15年間、地図なき旅をどのように過ごしたらよいであろうか。何時も地図や時間に追われたい予定のない旅がしたいと願ったのは何時の頃からだろうか。その願ってもない「あてどもない旅」ができる喜びと不安。旅の楽しみは計画を立てる時に半分はある。どのような計画をたてればよいであろうか。

「地図のない旅」地図がないのでなくて、本当はどの地図を使用したらよいかわからないのが本音でないだろうか。

学生によく一般教育のⅢ期の余裕時間、自分で

自分の時間をデザインできるまたとない時間だと話していた、その時間が自分に与えられるのである。今の倍も年金があれば悠々自適もできようと思ったり。

小さな研究所；町に一室借りて電話をひいて、電話番号をおくと最低月30万円かかる。ただ苦勞して月30万円かせいで、自分の給料もないのでは何のため苦勞するのかと話をしたら、ある人が仕事が残ればよいでないかと言ってくれた、確かにそうである。時期すでに遅し。それにしても幾つかの部屋を貰い、校費をもらい、時に科研費が当たって、給料がすくない、旅費がすくないと太平楽を並べていた時がなつかしく、なぜもっと仕事をしなかったのかくやまれる。

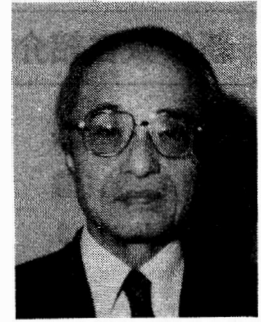
井伏鱒二は干武陵の「勸酒」に次の訳を与えている。

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

水仙や 地図なき旅の はじまらん

昭二

ゆくりなく……



教養部教授 **いもり くにひろ**

昭和26年3月、(旧制)京都大学文学部文学科独語学独文学専攻卒業。同年4月、新制大学として発足間のない新潟大学教育学部長岡分校に赴任。ドイツ語担当。爾来21年。そして、大学紛争の火まだ消えやらぬ昭和47年4月、富山大学教養部に転任。そしてまた21年。大学改革の新しい波うち寄せるいま、定年退官となる。両大学あわせて42年間の勤務。長丁場を何とかこなして、ようやくゴールインというところか。23歳の青年教師は65歳の老年？ いや、定年。まさに有為転変、茫洋たる思いである。

退官の弁、といっても生来無器用な私には、そうかんたんに筆が乗らない。しかし、何かを語るとなれば、先ず次の歌からはじめなければならないだろう。

ゆくりなく呉羽の山の日の暮れの
花の呪文にうかるるわれは

(所収『反照』)

富山大学に着任早々、大谷重彦先生、奥貫晴弘先生ほかドイツ語の先生方に連れられて、呉羽山の花見に出かけた。立ち並ぶ五百羅漢。私が神宮皇学館大学予科生だった頃(昭和20年)の学長、山田孝雄先生のお墓。そして花、酒。酔うほどに、ゆくりなく……熱いものが身内に充ちあふれたのである。後に大谷先生がこの歌に曲をつけてくださり、ドイツ語の先生方、独文専攻の学生たちによって、コンパなどで幾度となく歌われた。私もいっしょに歌った。その曲譜を記念にと大谷先生に乞うてお許しを得、この拙文に添えさせていただくことにした。感謝申し上げる。

暮れなづむ呉羽の山に霞む花
いとせ過ぎていとせの人

(所収『飛沫』)

めまぐるしく5年が過ぎ、10年が経ち、いつしか20年、21年、もう研究室の窓から呉羽山を眺めることもない。さまざまの事が去来する。

いま、時を同じうして教養部は廃止。教養部教官は各学部に分属。しかし、私は去らなければならない。大学での「わが事畢る」である。後は一介の布衣。ここに、万感の思いをこめて歌一首を記し、お別れとしたい。

瞬きのうちに足あと消しながら
夕ぐれの波さはやかに引く

ゆくりなく

四 大 節 堂 考

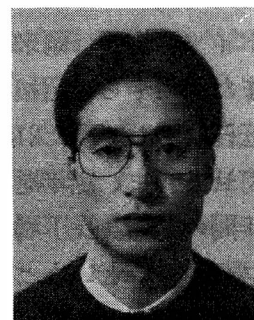
Moderato Lento

ゆくりなく
はのやまの
のくはの
のいしん
かろわは
のいもんに
のろわは

新任教官紹介

岸 田 文 隆 講師(人文学部) 4. 11. 16
平 3. 3 京都大学大学院文学研究科
博士課程単位修得退学
文学修士
担当：朝鮮語・朝鮮文学

着 任 に 際 し て



人文学部講師 岸 田 文 隆

11月16日付けで、人文学部語学文学科の朝鮮語朝鮮文学コースに講師として着任しました。早速、講義を担当しております。どうぞよろしくお願いいたします。

出身は大阪府枚方市で、大阪外国語大学朝鮮語学科の学部、修士課程を終えたあと、京都大学大学院(修士、博士課程)で言語学を学びました。昨年3月に博士課程を単位修得中途退学し、この11月15日までは、関西にあるいくつかの大学で非常勤講師として朝鮮語を教えてきました。この度、朝鮮学の専門コースのある富山大学に採用され、将来を思い煩うことなく研究と教育にうちこめる環境に恵まれたことを、妻子(2歳の息子がいます)共々喜んでいます。

研究対象としては、今までは主に李朝時代の通訳官養成機関であった司訳院刊行の満州語学書を扱ってきました。これからは、朝鮮語史一般にもうすこし研究の幅を広げ、その他

の資料も扱っていかうと思っています。授業では、近世語資料の一つである『太上感応篇図説諺解』という資料を読んでいます。道教に関する絵入りの古風な文献で、学生にはちょっと退屈に感じられるかも知れないとは思いつつ、自分自身の勉強のために迷惑を顧みず読んでいます。





アフリカはまだ遠いか

—マリの村での生活から—

人文学部教授 ^{あか}赤 ^ま阪 ^ま賢

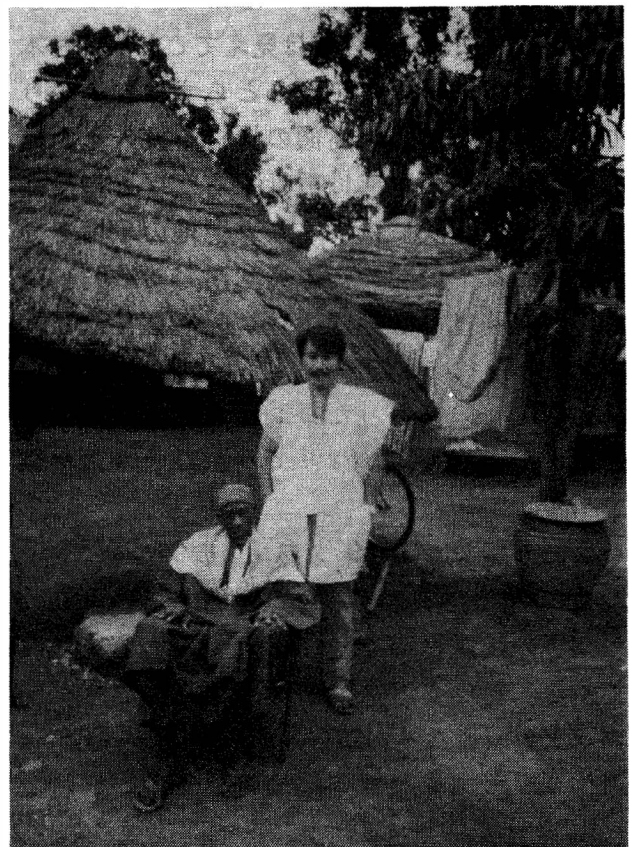
年末・年始のスポーツ番組をみていると、ケニアやエチオピアからの留学生が高校や大学対抗の駅伝競争に登場していた。その目覚めしい活躍を応援しながら、アフリカ出身の選手がオリンピックで英国やフランス代表として活躍したように、日本の代表選手となる日がいつか来るのだろうかと考えた。

アフリカもだいぶん身近になったとはいえまだ遠い。西アフリカの国々の事情についてはまだあまり入ってこない。サハラ砂漠の南にひろがるサヘル諸国のひとつ、マリ共和国といっても、すぐ思い当るひとは少ないだろう。地球規模の環境問題などに敏感なひとなら、旱魃とか砂漠化の進行の舞台と気が付くかもしれない。また、音楽に詳しければ、ワールド・ミュージックの分野で活躍しているサリフ・ケイタやカセ・マディなどがマリ出身ということを知っているにちがいない。また、アフリカ美術や工芸の展覧会などをみたことがあるひとなら、知らず知らずのうちにマリの民族のすぐれた造形の仮面や彫像、色あざやかな織物や染色にふれているはずだ。

西アフリカに行くにはヨーロッパ経由が便利で、パリやブリュッセルなどの空港からはひとつとびの距離だ。だから逆にマリなど西アフリカからの移住者も多く、アフリカの雰囲気はパリで始まるといってよい。地下鉄の車内での会話のなかに懐かしいバンバラ語を聞き取ることもある。一度、出稼ぎをおえ国へ帰る男たちで満載の飛行機に乗り合わせて、出身地を聞いているうち共通の知人があった

りして驚いたことがあった。

文部省の科学研究費補助金による海外学術調査のため、わたしはここ数回マリに出かける機会をえた。この国の主要民族であるバンバラ農耕民を対象に文化人類学の調査を実施しているのだが、その過程で社会・文化の急激な変化を観察している。調査のためマリ南部のウレセブグ村に住み込んでいるが、ここでも消費文化の流入がすすみ、高値の花だったラジカセを持つのはもう当たり前のことだ。さらに、この数年でテレビの受信ができるよ



ウレセブグ村にて、住みこんでいる家の主人とともに

うになった。まだ村に電気が引かれていないので最初はソーラー電池で公共機関で見たが、最近では個人で自動車のバッテリーを使っている。テレビの普及は人々の視野を一挙に拡大した。若者たちは Madonna や M・ジャクソン、ヨーロッパのプロ・サッカーなどに夢中である。村人は世界情勢にも詳しく、雲仙の火山爆発のニュースをみて同情のことばをかけてくれたこともある。こんな時、もう世界はひとつなのだという実感がわく。

砂漠化や旱魃などで苦しむマリのことだから、各国から開発援助などのチームがはいっている。日本からも乾燥地での植林事業にボランティア・グループも来ているのだが、まだまだプロジェクトの数が少ない。残念ながら、金を出す人は出さない「援助大国」にとどまっているので、マリのひとびとの前に、日本の姿は見えてこない。日本の援助は現地の事情を汲みとらず独りよがり企業から調達した高額な機材を投入し、結局は日本企業の思惑に貢献するだけと指摘される。この解決にはアフリカ現地の事情を知るわれわれや民間の知恵を利用して欲しいのだが、外務省など官庁の壁が厚く意見などは取り上げられない。

ここで心のこもった援助、顔の見える援助とはどんなものか、マリでみたひとつの事例を紹介してみよう。

ウレセブグには近年フランスのブルターニュ地方のポンチビー市からの援助があり、これは両者の姉妹都市協定にもとづいて実施されている。毎年クリスマス休暇を利用してポンチビーの若者たちが20数人やって来る。同時に運びこんだプレハブ建築の資材を使い、診療



竣工式の光景

棟、保育所、学校校舎などの建設を、マリの若者たちと一緒に共同作業をおこなって、2週間で完成に漕ぎつける。

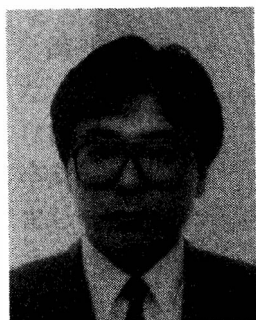
大晦日、新校舎の完成を祝う竣工式には、マリの文部大臣、知事など高官たち、フランス側は大使、市長などが列席し、首都からテレビの取材班なども駆けつけた。地元からは村長はじめ長老たちや大勢の村人が参列し、儀礼のダンスや伝統的な衣裳をまとった狩人の行進が式に花をそえた。

地元の切実な要請にきめこまかに対応し、ごく少ない費用で身軽に事業をすすめるこの援助方式は効率的であるだけでない。若者たちは共同作業をつうじ互いに学び合うところに特徴がある。その夜、タムタムの太鼓にあわせて楽しそうに踊るフランスの若者たちの姿を見て、日本の若者にもこうした異境で何かをやり遂げた幸福を味わって欲しいと感じた。アジアの村や町との姉妹都市関係による交流は最近さかんになっているが、それにアフリカも対象に加わるような日が来るのが待ち遠しいことだ。

画像・映像認識能力分析・

育成システムの開発に関する研究

教育学部附属教育実践研究指導センター助教授 よし だ まさ み 吉田雅巳



教育機器としての情報関連メディアの活用は近年盛んになった。特にコンピュータ等の情報関連機器については、平成4年からの学習指導要領改訂に伴い本県内の各校でも急速に設置が進んでいる。しかしながら、

それでも学校の対応は一般社会に比べて遅いのが常で、業務で使われているほど教育界でコンピュータ等の新しいメディアが道具として定着しているかというところはいえない。今のところ教育現場では「どう操作するか」に戸惑っているようにも見える。さて、それはそれとして、どの子どもも自由にコンピュータを学校で使えるようになり、授業であたりまえのように先生がコンピュータを使うようになる日が近いのは異口同音に言われている事である。

教育界ではこれまで長い間、実質上教科書や黒板という伝統的情報伝達媒体が学習の仲立ちとなっていた。言い換えると、学校で扱われている多くの内容が限られたメディアの表現形態に置き換えられていた。しかし、本来は「情報」がその伝達表現形式を決定するので

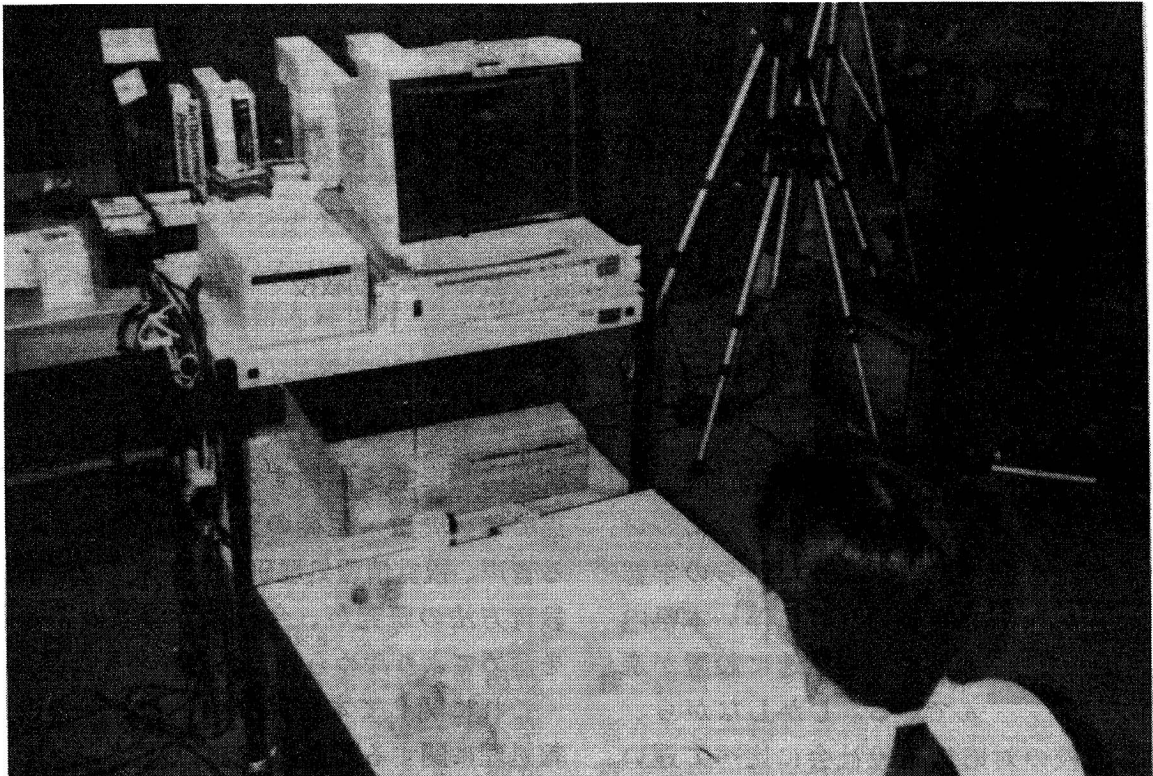
あって、例えば重要な資料がいつも教科書に書かれなくてはならないというようにメディアが情報形態を制約するものではない。この点では、児童・生徒の音声や動画などに対する音声、視覚情報処理研究や、メディア活用の教育方法の研究が、今後は現場での実践研究を含めてより深められる必要があると思う。

これに関して本研究では、子どもの視覚情報処理に関する調査と、特にCGアニメーションを中心とした教材作成方略の開発に取り組んできた。

さて、今回購入した機器の中で最も特徴的なのはDTVワークステーションである。これは高品位のCGアニメーションを容易かつ高速に作成でき、リアルタイムに表示できる。複数メーカーのさまざまなハードウェアの組み合わせで構成したが、ベースにしたのはコ



CGアニメーション



DTVシステム

モドール社製のマルチタスクマルチメディアパソコンである。そして、これにテレビ放送のCGアニメーションでもよく使われているNewTek社製のビデオトースター(VT)を登載した。このVTには、デジタルエフェクタ、クロマ、FRAME GRABBER、キャラクタGENE RATOR、GENLOCK、24BIT FRAME BUFFERなどおよそCG作成に必要な機能の全てが納められており、かつREXX対応しているので、プレゼンテーションソフトウェアと組み合わせた利用ができる。これを活用して、現在はこれまでの調査結果から得られた知見を基に、研究室活動や授業といった場面を通して学生の方々とCGアニメーション教材の作成を行っている。これまでの描画ツールを用いた教材作成では、どうしてもソフトウェア、ハードウェアの機器が作品の質や内容を制約し、また生産性も悪かった。これはコンピュータやAV機器の教材活用を困難にし

ている要因の最も知られているものである。実習でも、指導していて教材内容の映像化を目指すところが機器操作指導にすり替えられた感があり釈然としなかった。しかし、今は研究・実習の中で内容を議論できるようになり、教材や調査資料の製作も大変簡便となり満足している。しかし、残念なことに私には「絵心」が皆無とっていいほど無く、メディアが便利になればなるほど自分の感性、表現力の貧弱さが浮き彫りとなりがっかりさせられている。．．．やれやれ！

反面、若い学生達の熱心な取り組みや、普段見られぬ隠された描画の才能のすばらしさには感心させられ、また教えられる事が少ない。

私の過去、現在、未来

外国人留学生（経済学部3年） チン 陳 セン 泉 バツ 発
（マレーシア）



海外で勉強することは私の幼い頃からの夢でした。約4年前、留学の機会がやってきました。私は日本を選びました。なぜかと言うと、私は高校卒業後、1年半ほどセールスマンの仕事をしていました。その間、商売に関することはもちろん、さまざまな人達と接する機会があって、金融会社に勤めている人達と商売に関して話し合うこともありました。日本の経済に関する話を聞くこともありました。しかし経済に関してほとんど知らない私は、日本とマレーシアの経済関係についても初めて聞くことばかりでした。このような生活を通して、私は経済学に興味を持つようになりました。そして経済学を学ぶならやはり日本がいいと思いました。第二次世界大戦後、資源が乏しく国土も狭い日本は、経済の面で一生懸命に目標に向かって進んできました。そして今日、日本は世界の経済大国と言われるようになり、他の先進国と肩を並べるようになりました。それで、私は日本に留学して勉強する決心をしました。それから、「Made in Japan」の製品をよく見るようになり、その時から、いつか必ず日本へ行きたいと考えました。

今から振り返って見ると、日本に来る前いろいろな計画を立てて、最善を尽くしてガンバロウと決心して来日しました。はじめての日本、見るものすべてが私を興奮させました。しかし、同時に私は日本に来たばかりですから、友達がいなくて、言葉も全くできませんでした。特に習慣と生活が違うので、いろいろな悩みがありました。その時、東京にある日本語学校で、一日に僅か四時間の勉強で、先生が日本語と日本の習慣を教えてくださいました。先生はよく私たちに二つのことを言ってく

れました。一つは、自分を大切にしてくださいと言うことです。自分を大切にしていれば、難しい状況に置かれても進むべき道が見えてくるでしょうし、また他人もあなたを大切にしてくれます。もう一つは、できるだけ広く人と交わり、いい友達を作って下さいと言うことです。これからは日本人の中で勉強するわけですから、日本人の友達を作る機会も増えるでしょう。勉強ももちろんですが、外国人の友人を作ること、これも留学の大きな目的ではないでしょうか。先生の励ましの言葉は私にとって、とても感謝したい気持ちがいっぱいありました。

過ぎた半年で、クラスの皆さんとほんの少しの日本語で心を通じて、最も楽しい学校生活を過ごせました。言葉の力と言うものが感じられました。夏休みの終わりに研修旅行で京都と奈良に行きました。はじめての日本の国内旅行ですから、とてもいい思い出ができました。最初に行ったところは奈良です。東大寺、法隆寺、薬師寺、奈良公園などへ行きました。お寺はみんな有名なものばかり



立山自然保護センター前にて

りですが、やはり東大寺が一番印象に残りました。なぜかと言うと、初めてこんなに大きい大仏を見たからです。いちばん悲しかったのは薬師寺です。あの時はちょうど台風16号が来ていたので風も吹いたし雨も降ったし、それで何も見られませんでした。次は京都へ行きました。二条城へ行って、私は将軍と城のことをもっとよく理解するようになりました。また、東映映画村に行った時は昔の時代へ行ったような感じがして、おもしろかったです。あの旅で私は今までよりもっと日本の事情を理解しました。

1年半たって、日本語が話せるようになりました。私は進学のためにいくつかの大学の入学試験を受けました。運がよく富山大学に合格しました。富山に来てから、全く新しい生活が始まりました。日本の伝統的なものがあまり残っていない東京と比べると、富山の方がずっと沢山の勉強ができると思います。言うまでもなく、富山県の生活のし易さと人々の親しみ易さであることは皆さんもよくごぞんじでしょう。やはり勉強すれば、富山が一番いいと、私も認めます。また、富山の雪はすごいとよく聞かされたので、ちょっと心配しまし

たが、雪に対して憧れを持っている私は本格的な雪を見たい気持ちもありました。

富山に来てから早くも3年が過ぎました。大学の生活を振り返って見ると、つい笑ってしまうことも多いし、つらかったと思うことも多いです。日本の生活に慣れて、赤ん坊から大人に変身していくような気がします。まだ1年間の大学生活はできるだけたくさんを身に付けて、人間らしい生活、充実した日本での生活を送りたいと思います。それから、またどんな新しい事に出会うか、どんな新しいことが起こるか、誰もわかりません……！ ガンバロウしかありませんかなあ！

最後に、この学園ニュースの一角をお借りして、謹んで心から感謝を申し上げます。私はこれからも留学の初期の目標を達するように、頑張ります。それから、日本で学んだ知識及び日本の多くの方達の友情を一杯マレーシアに持って帰り、日本とマレーシアの文化交流のために、私のささやかな力で貢献したいと思っています。

(THANK YOU VERY MUCH)



クリスマスでの交流会

平成4年 日本金属学会・日本鉄鋼協会

秋期講習大会を終えて

工学部教授 大岡 耕之

平成4年10月6日、7日、8日111回日本金属学会・124回日本鉄鋼協会秋期講演大会が秋日和に恵まれて富山大学五福キャンパスで開催された。今回の富山大会は昭和53年以来実に14年振りであり、近年の学界、企業の高度に活性的な学術活動を反映して外国人特別講演、シンポジウム講演、一般講演を併せ過去最大の2215件と前回富山大会の約2倍の規模となり、従って日本鉄鋼協会の講演は工学部、理学部2号館21教室を、日本金属学会は教養部、人文学部の25教室が使用される事となった。



秋日和に恵まれて続々五福キャンパスへ

その他管理室等を含めると学内67の教室、会議室と黒田講堂が使用され、大学関係部門の御理解及び直接設営管理運営に当たった学内関係教官13人、企業巡道社員14人の周到な準備と113人の協力学生の努力により支障なく終了し極めて好評であった。とくに座長補佐として講演会場の運営に当たった本学学生の眞摯な態度は評価高く賞賛の言葉を多く頂き、本稿を借りて厚く御礼申し上げます。

日本金属学会、日本鉄鋼協会はともに会員数1万人を有する我国有数の由緒ある学会である。日本鉄鋼協会は、大正4年、日本金属学会は昭和12年に設立され、技術と理論面で両学協会は車の両輪のごとき関係を保ちながら春（東京地区）、秋（全国7地区輪番、北陸信越支部では富山、石川、新潟地区輪番21年に1回）2回の講演大会、その他多角的な学術活動を通じ我国材料科学、工学の発展に計り知れない貢献を果たし、さらに時代の変遷に対応して総合材料学会に変貌しつつ新時代のリーダーとしての役割を果たして続けている。日本鉄鋼協会は萌芽・境界領域を拡大し、チタン・チタン合金の生産技術、材料開発を始め広く機能材料を包含して研究討議が盛んである。日本金属

学会は金属・セラミックスを中心とする総合材料学会として躍進を続け、今回一般講演の中で発表討議が集中された金属間化合物、セラミックス、磁性材料、超伝導材料、非晶質、接合等の諸問題は先端技術部門における最関心事であり、とくにシンポジウム課題の中に取り上げられ討議された高温超伝導体の線材化及び金属系人工格子の構造と物性は次世代機能材料として期待が大きく研究開発の現況を、前者については実用化に懸命の努力を拂う企業間連携、官研究機関の関わり、大学、企業の独自研究の現況を理解する上で極めて有意義であった。

全国から来富される5000人に及ぶ研究者を温みと誠意をこめて迎えるべく富山大学関係教官を中心に編成された北信越支部実行委員会は2年にわたって諸般の準備を重ね、10月6日名鉄トヤマホテルの懇親会は夫人23人を含む産学官497人が出席して盛会であり、立山一泊コース、黒部峡谷婦人コース等見学会、地域産業の紹介を目的として2300人以上の入場者を数えた展示会、若い研究者の集いジュニアパーティ等多彩な諸行事も無事好評裏に終始した。

(文責 講演大会実行委員長 大岡 耕之)

オフィス・オートメーション学会第26回全国大会を終えて

経済学部助教授 おお 太 田 ま ま 晴
太 田 雅 晴

11月13、14日、黒田講堂及び経済学部を会場として、第26回OA（オフィス・オートメーション）学会全国大会が開催されました。

OAと言う言葉から連想されるのは、一般的にはワープロ、パソコン、ファクシミリなどの事務機器をイメージしますが、それはOAの初歩的段階で、現状ではFA（ファクトリー・オートメーション）に対する概念として、事務部門、さらには企業および事業体の経営全般のコンピュータ化、合理化を目指しており、実務界においては、重要な戦略的経営課題となりつつあります。これらの分野に関連した学問は情報技術の発展とともにここ10年間の間に進展した分野ですが、北陸地区でこの分野の全国大会が開催されるのは初めてでもあり、全国の学界、産業界の人達250名が参加し、たいへん盛況な大会となりました。

今回の大会の統一テーマは、「ダウンサイジングとOA・FA」で、この数年急速に進展しつつあるコンピュータの小型化に伴う経営課題や教育問題についてでした。大会の進行は、経営戦略・組織、システム開発方法論、企業や大学等のユーザー、コンピュータの開発・製造の4つの各々の観点から統一テーマに関する研究報告がなされるとともに、会員の設定した自由なテーマに基づいた研究発表や討論が活発に行われ、最終日には参加者が一同に会し、統一テーマについてパネルディスカッションが行われ、現状の問題点や今後の研究課題が検討・整理されました。学生の皆さんにとって大学における情報関連教育が今後どうなるのか興味があるのではと思いますが、パネルディスカッションでも議論の対象となり、実務界からは大学の教育に振り回される人材開発の現状や文系分野の人達への期待等の意見、学界からは人・設備の不備と教育方針が一致しない等の意見が出されましたが、専門知識と連携した大学における情報処理教育が今後の日本経済の人的基盤を形成



パネルディスカッション風景

する上で望まれるし、実務界と教育・研究機関との対話が必要であるとでも総括しておきましょう。

大会では、この他に植村元寛元経済学部長の「富山の売薬商人」と題する記念講演、会議や各種意思決定をコンピュータ・ネットワークによって行うグループウェアの最新の研究動向を紹介する特別講演、情報関連企業各社によるマルチメディアなどの新製品のデモンストレーション等が行われました。特に植村先生の講演は好評で、300年生き続けた経営の根幹が、全国を行脚する商人と富山との連絡を密にし、今風に言えば富山を中核としたネットワークを展開し、情報を迅速に収集して時代と販売地域に柔軟に対応した各種経営方策を展開したことにあり、さらにその結果得た財の蓄積が富山の各種産業の振興の基となった、とのお話は、OAの今後を考える上で参加者に多くの示唆を与えたようです。大会の統一テーマであるダウンサイジングの背景にはコンピュータのネットワーク化が基盤としてありますが、それを種々の観点から考察する意味でも富山で大会を開催できたことは大会の運営に関わった委員一同栄誉に感じたと思います。

（文責 経済学部助教授 太田 雅晴）

全日本大学選手権ボーリング部門で

富大「女子の部」が準優勝に輝く

全国の学生ボウラーが目標とする全日本大学選手権ボーリング大会が、去る12月9日に品川プリンスホテルで開催されました。更に今回は、第30回を記念して文部大臣杯争奪戦という名誉ある大会となり、男子46校、女子16校が日頃の練習成果をぶつけあいました。

本学は、初日・2日目の予選を終了した時点でのゲームトータルでは4位でしたが、今大会は、特に1・2年生の強さが目立ち、最終日の準決勝以後の試合では



全日本大学選手権で準優勝した女子チーム



今年度は中部地区で年間優秀団体としても表彰された

混戦が予想されました。この中において、本学は好調だったアンカーが10フレをしっかりと締めくり入賞が決定しました。他大学はミスが目立ち始め、最終的には45ゲームの総トータルで、本学女子の部が3年ぶりに準優勝の栄冠を手にしました。

なお、今年度は8年連続優勝の仏教大学に770ピンという大差をつけられましたが、来年度はレベルアップしたチームが組めるため今後期待出来そうです。

富大フィルハーモニー管弦楽団

世界一流の音楽家を招き公開練習！

昨年の11月20日から22日にかけて、私たちは元ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターでいらっしゃった、ウォルフガング・ポデュシュカ先生をトレーナーにお迎えし、黒田講堂にてオーケストラの指導をして頂きました。今までこのように著名な方をお呼びすることはあまり有りませんでしたし、また私たちの日常活動風景を見て頂ける良い機会でもあると、卒業された先輩方

をはじめ一般の方々にも来てもらうべく「公開練習」という形で行いました。

迎えるにあたって、大家を迎えるわけですから私たちは緊張し、通訳の方を置いたものの、果たして先生の細かな指示を聞き取れるかどうかと不安にもなりました。しかし、悪天候の中を「ゲーテンモルゲン」と現われた先生は大変温厚な方で、私たちの未熟な演奏にも簡単な英語をもって辛抱強く指導して下さい、おかげで楽しい雰囲気を持つことが出来ました。もちろん音楽面に於いても、今まで納得できずにいた箇所の表現方法や感じ方のコツを教えて頂くなど大変実りのあるものでした。

先生は音楽の他にも、水泳や登山や・スキーを趣味とされているせか体も丈夫で、連日わずかな睡眠時間でお疲れだろうと気遣う私たちの思いもよそに、水族館見物に行ったり宴席に加わったり



練習終了後の記念撮影（中央がポデュシュカ氏）

と、その元気の良さは私たちが見習わねばならないほどでした。

すっかり先生に魅了された私たちは、都合があえれば今年もお招きしたいと思っていますので、その際にはまたみなさんにも見て頂けることかと思っています。

最後になりましたが、この企画が実現できたのも大学関係を始め、日頃私たちを応援して下さいの皆様のお陰と思い、感謝するとともに今後より一層すばらしい音楽を目指し精進を誓う次第です。

（富大フィルハーモニー管弦楽団）

本学教育学部附属中学校コーラス部

全日本合唱コンクール全国大会「中学校部門」で

『金賞』『文部大臣奨励賞』を受賞



表彰式に臨む堀江教諭とコーラス部員

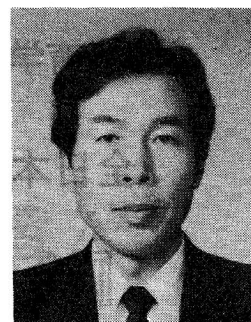
本学教育学部附属中学校コーラス部が、昨年11月1日府中の森芸術劇場（東京都府中市）で開催された第45回全日本合唱コンクール全国大会中学校部門、第2回全国中学校合唱コンクール全国大会に中部代表として出場し、全国各地から推薦された49校が熱唱する中、昨年度新設された中学校

部門での「銀賞」に引き続き、今年度は見事「金賞」「文部大臣奨励賞」を受賞しました。

同校コーラス部は64人編成の混成合唱団で、堀江英一教諭の指揮により「風のめぐるとき」「河童と蛙」の2曲を歌い上げ、この栄冠に輝いたものです。

蛇行から得たもの

富山県立近代美術館副館長 武内律馬
(昭和35年教育学部卒業)



小学生のころから地図を見るのが好きだった。漠然と「地理の先生」になろうと思うようになったのは中学生になったころ、そして、その決心が確かなものになったのは、高校で地理の授業を受けるようになってからだった。

ところが、大学で地理学を学んでいたことは、教師になるのは極めて難しい時代であった。「多少でも条件を有利にするには、英語の免許を取ることだよ。」と指導教授に奨められた。

英語の免許を取っていたためか、卒業と同時に音川中学校に勤めることができた。2年2学級の英語と国語、3年1学級の英語と国語、合わせて週27時間を担当することになった。蛇行の始まりである。国語は教育委員会に所定の手続きをとって受け持った。

学会で活躍する先輩たちに羨望を感じながらも、教科指導に部活動に打ち込んだ。国語を持ったこともよかった。与えられた字数で自分の思いや考えをまとめる習慣が身についてきた。また、漢字の正しい筆順もマスターできた。

雄山中学校では英語だけを受け持ち、パーマーやフリーズの教授理論を取り入れ、生徒たちの実力向上に躍起になった。英語に関しては門外漢ただけに負けてたまるか、といった意識がどこかにあったのだろう、英語教育に熱中した。同人誌を友だちと刊行したのもこのころである。が、「地理の先生」になりたい、という夢は断ちがたかった。やっと盲学校へ転任し、中学部1年の社会科(地理的分野)を受け持った時は、教職に就いてからすでに10年の歳月が流れていた。

ところが、間もなく指導要領の改訂に伴って新設されることになった「養護・訓練」に取り組むよう仰せつかった。日本ライトハウスに出向き、「養護・訓練」の指導内容を整えるため、アイマスクをつけての白杖訓練など様々な実技指導を受けた。それがほぼ固まった時点で八尾高校に転任

することになった。

ここで、初めて地理だけを担当することができた。『高視研』の事務局を預かりながら、視聴覚機器を活用した授業に取り組むことができた。書道を再開したのはこのころである。

それもつかの間、転じた上市高校では校内事情もあって、倫理社会を担当することが多くなっていった。そんな折、「現代社会」が必修科目として新設されることになり、その調査研究のため国立教育研究所へ内地留学することになった。

ある出版社から依頼され、高校生用参考書「理解しやすい現代社会」「高校生のためのシグマ現代社会用語5000」を出したこともあって、以降、「現社の先生」と呼ばれるようになった。

さて、県の芸術文化協会に出向するに及んで、蛇行は一層激しくなっていた。ここでは「青少年美術展」「県民劇場」などイベントの運営や、「芸文とやま」「とやま文学」など機関誌の編集といった全く新たな仕事に当たった。

また、県教委生涯教育室では、生涯学習が大きな関心を集める中で、「県民カレッジ」構想に加わることになった。やっと復帰した現場、富山南高校でも「現社の先生」で通った。

学術国際課に呼ばれ、アジアの4か国へ海外技術研修員のフォローアップ調査に出掛けた。これは、これまでやってきたことの集大成とも応用編ともいえるものであった。

青天の霹靂とはこんな状況のことか。この4月に美術館へ異動、蛇行から得た貴重な経験と出会った方々を頼りに、その運営のあり方を模索している昨今である。

生涯一地理教師を目指すつもりが、いつしか予想もしない蛇行を展開することになってしまった。だが、今は様々な機会を与えてもらったことに感謝しつつ、ある感慨も覚えるのである。定年まであと数年、まだ蛇行が終わったわけではない。

ワンダーフォーゲル部

我々ワンダーフォーゲル部は、主に登山により自然に親しむということを基本方針として日々活動を行っている。

富大に入学し、富山に来ると、まず目につくものは何かと言えば、やはり北アルプスの白く大きな容姿だろう。そして、その姿にあこがれ心をうばわれた者の集まりが我が部である。

現在、男16人、女7人で形成する我が部の活動の内容には、合宿と個人山行があり、合宿は月1回くらいの割合で行っている。まず最初の目標となるのが夏山合宿で、これは各パーティー1週間以上の長期山行を行っている。'92年度は、北は北海道、南は屋久島という幅の広い活動を行った。そして、年間を通しての最終的な目標は3月に行う春山合宿である。毎年北アルプスの厳しい山に登っている。

また、夏には立山にある富山大学立山施設（浄土小屋）へ行って、そこで1ヶ月間小屋の修理や登山者の安全確保などを行っている。そして、その間に体育会が行っているオープン登山の援助もしている。

個人山行では、岩登りが好きな者、スキーが好きな者、それぞれがさまざまなスタイルで山に行っている。

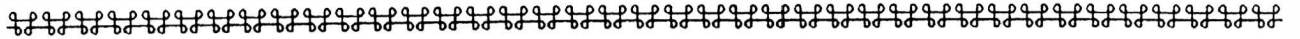
'92年度は、我が部にとって40周年をむかえる年で、秋に今までのOB全員に連絡をとり、大々的に集会を行った。体を張った活動をしている我々にとって、OBの助言はとても大切なもので、OBなくしては現役は活動を行っていけない。そこで、OB会なるものを作ってもらい、コンパ等につながりをもっている。

最後に、現在我々は活動に行きづまっている。競技部でない部は、どこに目標を置くか非常に難しい。特にワンゲルは厳しい山を活動の場としているので、内容によっては非常に危険なことになりかねない。そこで安全を第一に考え目標を定めなければならない。毎年、正月を過ぎると2年生は眠れない日々が続く。

来年度はどういう方針となるか後輩に期待している。



春の室堂平にて



ギター・マンドリンクラブ

今年で30数年も続けてプレクトラム音楽の普及と発展を目標に活動しているギター・マンドリンクラブです。プレクトラム音楽とは“弦を弾く音楽”という意味で、弦楽器を使用し、みなさんに音楽の楽しさを伝えるべく活動しています。楽器は、マンドリン、マンドラ、マンドリンセロ、ギター、コントラバスで編成されています。

演奏会は主に5月と12月の2回で、5月の演奏会は金沢大学などと合同で行い他大学との交流を深めています。12月はこのギター・マンドリンクラブにとって最大のイベントであり、4年生にとっては最後の演奏会です。演奏会では、マンドリンオリジナルの曲やポピュラーな曲を演奏します。前回の演奏会では“アイネ クライネ ナハトムジーク”“スペイン第2組曲”“エスパニアカーニ”などという広く世間に知られている曲をマンドリンを使ってアレンジして、みなさんにおとどけしました。その他の活動としては、総曲輪、中央通りなどの街頭や小中学校などへ行き演奏したりしています。昨年は利賀村で開催された世界そば博の会場で、マンドリンやギターなどの音色を奏でました。

マンドリンという楽器は世間ではあまり知られてませんが、以外と多くの所で目にしています。たとえば、テレビのコマーシャルを注意して聞いてみるとマンドリンが使われていることに気づくことでしょう。

マンドリンは世間ではあまり知られていないと先に述べましたが、バイオリンが得意？ というイ



練習に励む部員達

メージを受けているサザエさんの夫であるマスオさんも、押入れの奥の片スミにあるとはいえマンドリンを所有しています。マスオさんが久しぶりにマンドリンを弾こうとした時には、なんとカツオくんがゴミ箱にしていたくらいに有名な楽器です。これは本当にあったお話なので、この文章を読んだ人は友人、先生、すぐ隣にいる人などに聞いてみてください。きっと知っているはずですよ。

活動日、活動時間などは演奏会1カ月前以外は、自分の開いている自由な時間に練習しています。この自由な時間を支えるということがこのサークルの魅力の一つであるので、学生の本分である勉強にさしつかえなくサークル活動を行えます。そして楽器を弾く以外にも数々の楽しいイベントもあり、1年はあっという間に過ぎてしまいます。また、2年生から入って来た人も気軽に楽しく活動できるサークルです。

春になれば入学式の演奏や、黒田講堂で新歓のために演奏をしていますのでお気軽に聞きに来てください。では、演奏会などでお会いできる時を楽しみにしています。

外国人留学生と本学教職員との懇談会で更に交流を推進!!

— 「越中おわら」と「ビンゴゲーム」で一体となる —

富山大学では、毎年恒例になっている「外国人留学生等と本学教職員との懇談会」を、去る12月11日（金）市内のパレ・ブラン高志会館で実施した。

今年度は、中国、マレーシアなど10カ国の外国人留学生及び外国人研究者合わせて110名と、小黒学長をはじめ増田学生部長、今田事務局長、各部局長、留学生部会委員、指導教官、留学生担当職員など教職員50名が出席し計160名により和やかな交流を行った。



小黒学長を囲んでの懇談

職員による
越中おわら



懇談会は、小黒学長のあいさつに始まり、松本理学部長の乾杯の発声の後、学生部職員が富山県の民謡「風の盆-越中おわら節-」を歌と踊りで披露し、出席

した外国人留学生らから盛んな拍手を浴びた。

続いて、出席者全員で行われたビンゴゲームは、大きな歓声を誘い、それぞれが景品を片手に全員が一体となって懇談ムードを盛り上げた。

最後に、インド出身の JAYANTA CHATTERJEE さんから謝辞があった後、増田学生部長の閉会のあいさつで、和気あいあいのうちに懇談会が締めくくられたが、今回の懇談会の実施で留学生と教職員が更に打ち解け、より一層の親睦と相互理解を深めることができ、留学生交流推進につながる有意義な懇談会となった。



民族衣装も懇談会ならではの

在来生合宿研修

スキー講習会を振りかえって

去る1月7日から4泊5日の日程で、長野県志賀高原スキー場にて、在来生合宿研修が開催されました。約70名の参加者は、それぞれ上級から初級の12班に分かれ体育教官の下、技術指導を受けました。初日はあいにくの雨でしたが、3日目からは天候と雪質に恵まれ絶好の環境で講習ができました。

日中は、勿論スキーを楽しみました。夜は、班別にミーティングを行い、教官と班員、班員同士の親睦を深め合う場としました。映写会では、昨年の冬季オリンピックのスキー競技の様子を放映



し、参加者の滑りの参考にしてもらいました。分科会では、「スキーの楽しみ」「スポーツと健康」の2テーマについて話し合い、各々の班でいろいろな意見が交わされたようです。そして演芸会では、各組の趣向を凝らした出し物が我々を楽しませてくれたり、ある人の普段は決して見ることのできない意外な面を発見したりと、たいへん盛り上がりました。

最終日には、研修の集大成とも言うべき、タイムレースが行われ、参加者の皆さん全員に、この研修で得た力を発揮してもらいました。

この5日間、上・中級者は、思う存分スキーを滑ることができ、初級者も、教官の熱心な指導のおかげで、それなりに滑れるようになりました。北陸で、スキーをする機会は多くても、このように指導員について、きちんとした講習を受ける機会はあまりないと思います。ワンランク上の滑りを目指す人、他学部・他学年との交流をもちたい人には、この研修会が持って来いでしょう。

今年在来生合宿研修に参加された皆さんには、今回得たものを生かし、さらに自分のシュプールに磨きをかけてほしいです。

氷を割って寒中水泳

1月23日(土)この日は、今年の暖冬を象徴するような暖かい日となり、気温は9度まで上がりました。しかし、水温は2度。プール全面に氷が張り、朝から水泳部員が総出でスコップを使い、氷を割って2本のコースを作りました。

午後2時、市民や各サークル部員200名以上が見守る中、開会宣言に続き、増田学生部長が「日頃の厳しい練習成果を十分に発揮し、くれぐれも事故のないように」と激励され、最後に水泳部の山田大介主将が檄文(げきぶん)を読み上げた後、応援団が学生歌などで激励する中、水泳部員約40名がプールに飛び込み25メートルずつのリレーを行いました。

続いて、ユーモラスな仮装をした男子学生や、浮輪を手にしたチアリーダーらが次々に飛び込み

観客から盛んな声援を送られました。

最後に、水泳部員による部歌の大合唱で24回目の寒中水泳を締めくくりました。



平成4年度 後期授業料免除について

平成4年度後期授業料免除者の選考が、11月12日に開催された授業料等減免選考委員会で行われ、次のとおり決定しました。

なお、授業料免除及び奨学金を希望するうえで、たずねたいことがあれば、厚生課奨学係または各学部・教養部の学務係（経済学部、教養部は学生係）へ相談してください。

区 分	出 願 者	免 除 許 可 者	不 許 可 者
学 部	341 人	334 (105) 人	7 人
大 学 院	38	38 (10)	0
計	379	372 (115)	7

()は、半額免除許可者で内数

平成4年度富山大学学位記授与式について

〔旧卒業式〕

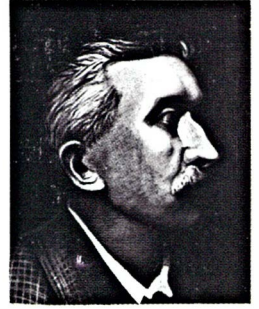
平成4年度富山大学学位記授与式が下記により举行されますので、卒業生及び修了生は出席して下さい。

日 時 平成5年3月25日(木) 10時30分
 場 所 富山市公会堂
 式次第 (1) 開式の辞
 (2) 学位記授与
 (3) 学長告辞
 (4) 閉式の辞

「へるん文庫」縁起 2

(蔵書を富山大学へ)

人文学部教授 ^{ひら}平 ^た田 ^{あつし}純



ハーンは1903年春に東京大学を離れ、翌年9月狭心症で没した。ハーンの亡き後、節子夫人の相談相手となり、遺作の刊行、全集の出版等の世話をしたのが、ハーンの東大での教え子であり、当時女子学習院で教鞭をとっていた田部隆次氏であった。

1923年、東岩瀬の素封家馬場はる子氏が高等学校を富山に作るために百三十数万円を寄贈された。同年10月、当局からの認可が得られ、校長には元学習院教授の南日恒太郎氏が迎えて、いよいよ開学の運びに至った。

南日先生は富山の山室の出身で、高等文官試験合格後、三高（現京都大学）や学習院の教授を歴任。1921年に退官、故郷へ帰って著述に専念しておられた。英学を志すほどの人がみんな熟読した『英文解釈法』『和文英訳法』の他にも、英米の詩と散文鑑賞のための名著といわれる『英詩藻塩草』『英文藻塩草』、さらに『熟語辞点』等の優れた著述もあり、新設の高等学校の校長としては最適人として出馬が要請され、郷土の人材養成のためならと、引き受けられたのである。

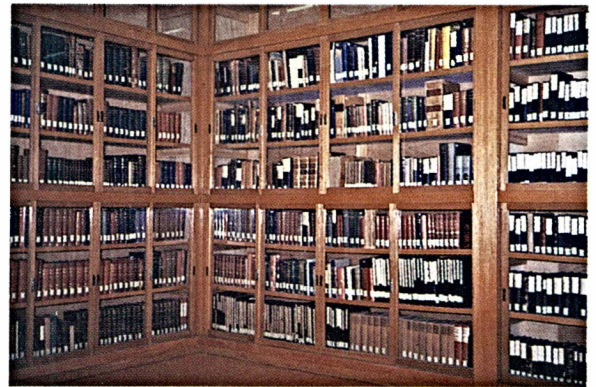
1923年9月1日の「関東大震災」で東京のほとんどが灰と化した。節子夫人は残されたハーンの蔵書がこのような災害で烏有に帰すことを恐れ、大学等の図書館に収蔵されることを希望されたので、田部教授の仲介で某大学と買収の話が進行していた。たまたま文部省との折衝で上京中の南日校長が田部教授からその話を聞かれて、ハーンの蔵書をぜひとも譲り受けたいと申し入れられた。僻地とされる富山に「いい先生に来て貰える」だろうし、またこれを機縁として富山を文化の中心地にしたい」という願いからであった。ちなみに南日校長は田部教授の実兄であった。結局ハーンの蔵書は、ハーンの日本に関する最終的結論ともいう

べき『日本…解釈の試み』の手書き原稿（1200枚）を加えて、1924年6月、馬場はる子氏から開校の祝いとして寄贈された。購入価格は1万5千円であったという。

蔵書引取りの際、南日校長は遺族に是非というものは手元に残すようにといわれたという話は南日校長の人柄を示す好個の物語であり、蔵書が富山へ送られるとき、見送るために上野駅で泊り込んだ人がいたという逸話はハーンに寄せる人の愛惜の念が強かったかを示す指標である。

こうして富山へ来たハーンの蔵書は、英語の書籍1352点（手書き原稿2点を含む）、フランス語のもの719点、日本語によるもの364点、計2435点である。文庫目録の序文に見られる‘ May it serve as Pierian spring ! ’（願わくばこの文庫がピエリアの泉とならむことを！）という言葉には文庫に寄せる南日校長の思いが読み取れるであろう。

（*ピエリアの泉とはオリュンポスの山の麓にあった詩文芸術の神々ミューズの泉であり、その水を飲むことで詩想に溢れたという。）



へるん文庫の貴重な蔵書

▽▲▽▲▽ 学園ニュース編集委員

学生部長	増田	信彦
人文学部	中村	雅之
〃	岩井	瑞枝
教育学部	呉羽	長
〃	原田	嘉昭
経済学部	伊藤	格夫
〃	長谷川	隆

理学部	広岡	公夫
〃	鳴橋	直弘
工学部	女川	博義
〃	長谷川	淳
教養部	高安	和子
〃	山本	孝一